

A ñ
é ß

STARTER STORY ・ JAPANESE ・ B2

いつか、という言葉

いつか、という言葉

佐緒里の手帳の最後のページには、もう何年も同じ一行が書いてある。「時間ができたら、真山先生に会いに行くこと」。手帳を新しくするたびに、その一行だけが几帳面に書き写されてきた。

真山先生は、佐緒里が子どものころに通っていたピアノ教室の先生だった。厳しい人だったが、レッスンの最後にはいつも、庭の花を一輪、譜面台に置いてくれた。「音楽は急がないの。花が咲くのも同じよ」というのが口癖だった。

高校に上がると、佐緒里はピアノをやめた。受験があり、部活があり、やがて就職があった。ピアノをやめる日、先生は何も責めなかった。ただ「いつでもいらっしゃい。鍵盤は逃げないから」と言って笑った。

それから二十年が過ぎた。佐緒里は楽器とは何の関係もない会社で働き、日々は音を立てて過ぎていった。それでも年賀状だけは欠かさなかった。先生からの返事には、毎年、庭の花の写真が添えられていた。

「いつか行こう」と思わなかった年は、一度もない。ただ、その「いつか」には不思議な性質があった。近づこうとすると、同じ距離だけ遠ざかるのだ。仕事が一段落したら。次の連休になったら。もう少し、心に余裕ができたら。

今年の春、年賀状の返事が来なかったことに、佐緒里はふと気づいた。花の写真が届かない正月は、二十年で初めてだった。胸の奥で、小さな鈴が鳴ったような気がした。

教室の電話番号は、もう使われていなかった。佐緒里は半日かけて古い住所録を探し出し、思い切って手紙を書いた。返事は先生の娘だという人から届いた。「母は元気ですが、最近は忘れることが増えました。会いに来てくださるなら、早いほうがうれしいです」

電車を乗り継いで三時間。窓の外を流れる景色を眺めながら、佐緒里は言い訳の練習ばかりしていた。ご無沙汰してすみません。ずっと来たかったのですが。仕事が多々。どの言葉も、口の中で薄っぺらく乾いていった。

先生の家は、記憶よりずっと小さく見えた。庭だけが昔のまま、手入れの行き届いた花であふれていた。玄関に出てきた先生は白髪になり、背中が丸くなっていたが、目元は変わらなかった。

「どちらさまでしたかしら」と先生は首をかしげた。覚悟していたはずの言葉なのに、佐緒里は一瞬、立っている場所がわからなくなった。娘さんが横から「昔の生徒さんよ」と助け舟を出してくれた。

居間には、あの頃と同じピアノがあった。黒い胴に窓の光が映っている。先生はお茶を出しながら、同じ質問を三度した。佐緒里はそのたびに、初めて聞かれたような顔で答えた。用意してきた言い訳は、一つも必要にならなかった。

「何か弾いてごらんなさい」と先生が言った。二十年ぶりの鍵盤は、ひんやりと固かった。佐緒里は覚えている限りの曲を、ゆっくりと、間違えながら弾いた。子ども頃、何百回も練習した小さな曲だった。

弾き終わると、先生は静かに拍手をした。それから、少しあきれたように言った。

「あなた、左手が転ぶ癖、まだ直っていないのね」佐緒里は鍵盤の上で手を止めた。名前は忘れられていたのに、癖は覚えられていた。

帰り際、先生は庭から花を一輪切って、佐緒里に持たせた。「音楽は急がないの」と先生は言った。その口癖だけは、二十年前と少しも変わらない調子だった。佐緒里は花を受け取って、深く頭を下げた。

帰りの電車で、佐緒里は考えた。自分があれほど恐れていたのは、先生に責められることだった。けれど先生は、責めるどころか、佐緒里が来なかった年月ごと、きれいに忘れてくれていた。覚えていたのは、いちばんどうでもよくて、いちばん大切なものだけだった。

家に帰ると、佐緒里は手帳の最後のページを開いた。「時間ができたら、真山先生に会いに行くこと」。その一行に線を引いて消し、隣に新しく書いた。「毎月第二日曜、先生の家。時間は、できたらではなく、つくるもの」。もらった花は台所の窓辺で、まだ揺れていた。

OQOU STARTER LIBRARY

This story is from oqou's free starter library, graded at B2 for Japanese readers.

Read it interactively in the oqou app: tap any word for an instant translation, listen with natural narration, and carry your saved vocabulary into every story you read next.

oqou.app

[Download oqou on the App Store](#)

oqou •